令和４年度 日本大学文理学部付置研究所　所員個人研究費　研究実績報告書

所属・資格　　英文学科・准教授

申請者氏名　　一條　祐哉

<table>
<tr><td colspan="2">研　究　課　題</td><td>英語の進行形の認知・心理言語学的考察</td></tr>
<tr><td rowspan="3">報告の概要</td><td>研究目的および研究概要</td><td>英語の単純形と比較しながら進行形の意味を研究対象とする。具体的には fictive motion 文を題材として意味論的考察をし、それに加えて心理言語学的な実験を行うことで両者の微妙な意味の違いを探る。</td></tr>
<tr><td>研究の結果</td><td>心理言語学的実験を行った結果、単純現在形の fictive motion 文に比べて、現在進行形の fictive motion 文の方が、参加者に画像を主観的に、3 次元的に捉えることを促し、参加者を画像内の状況に没入させる傾向があることが分かった。今回の実験方法は、従来の過去単純形と過去進行形を使用した実験方法と異なり、時制の影響がないため、より純粋に進行相と非進行相の違いを考察できる手法として提案した。<br>また will be Ving についての研究も行った。従来 will V と異なり、will be Ving は意志を表さないとされてきた。しかし、さまざまな実例を利用しながら意味論的分析をすることで、will be Ving も意志を表すことを提唱した。</td></tr>
<tr><td>研究の考察・反省</td><td>fictive motion 文に関する心理言語学的実験については、刺激文が画像の下に、質問文が画像の上に提示されることが、参加者の視線に影響を与えた可能性がある。したがってそれを避けるために、今後は刺激文と質問文を画面上に提示するのではなく、音声で提示するやり方を検討している。<br>また will be Ving については、意志以外の用法（ことの成り行きの用法など）を取り上げ、will be Ving の各用法の意味構造や使用条件を考察していきたい。</td></tr>
<tr><td colspan="2">研究発表<br>学会名<br>発表テーマ<br>年月日／場所<br><br>研究成果物<br>テーマ<br>誌名<br>巻・号<br>発行年月日<br>発行所・者</td><td>研究発表<br>①日本認知言語学会第 23 回全国大会<br>「fictive motion 文を利用した進行相と非進行相の違いを探る心理言語学的研究」<br>2022 年 9 月 3 日／オンライン<br>②日本大学英文学会 10 月シンポジウム<br>「英語の絵本で見る移動文と場所句倒置文」<br>2022 年 10 月 22 日／日本大学文理学部<br><br>研究成果物<br>①「意志を表す will be Ving」<br>『英語語法文法研究』第 29 号<br>2022 年 12 月 25 日／英語語法文法学会<br>②『正しく書いて読むための英語前置詞事典』(20. down、21. during、22. except/but、23. for、24. for、25. in の項)<br>2022 年 12 月 1 日／朝倉書店</td></tr>
</table>